

病虫害発生予報 第 5 号 (8 月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所

< 予報の概要 >

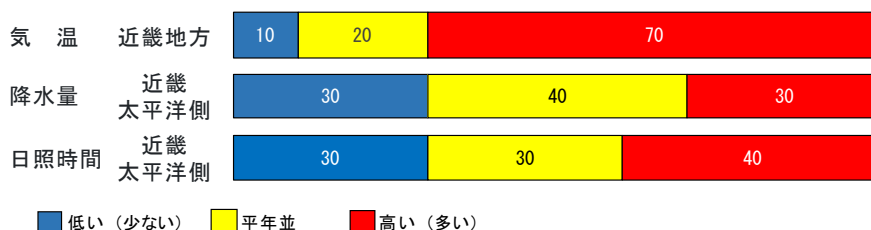
作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水 稻	いもち病	やや少	野 菜 全 般	ミナミキイロアザミウマ	並
	紋枯病	県北部・県中部 並		ミカンキイロアザミウマ	並
		県南部 やや多		ハスモンヨトウ	やや多
		並		シロイチモジヨトウ	並
	縞葉枯病	並	カ ン キ ツ	黒点病	並
	ヒメトビウンカ	県北部・県中部 やや少		かいよう病	並
		県南部 並		ミカンハダニ	多
	ツマグロヨコバイ	県北部・県中部 やや少		ヤノネカイガラムシ	並
		県南部 やや多		チャノキイロアザミウマ	やや多
	セジロウンカ	並		ゴマダラカミキリ	並
	トビイロウンカ	並	カ キ	炭疽病	やや少
	イチモンジセセリ	並		うどんこ病	やや少
	コブノメイガ	並		円星落葉病	やや多
野 菜 全 般	斑点米カメムシ類	やや多		角斑落葉病	やや多
	アブラムシ類	並		フジコナカイガラムシ	少
	ハダニ類	並	果 樹 全 般	カメムシ類	少

気象予報

近畿地方 1 か月予報 (07/26～08/25)

2025年07月24日14時30分 大阪管区気象台 発表		
特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月 07/26～08/25	天候	近畿日本海側では、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。近畿太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	日照時間	日照時間は、近畿日本海側で平年並または多い確率ともに40%です。
1週目 07/26～08/01	気温	1週目は、高い確率70%です。
2週目 08/02～08/08	気温	2週目は、高い確率70%です。
3～4週目 08/09～08/22	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)



I. 水 稲

1. いもち病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部および中部の普通期栽培における 7 月上中旬の葉いもちの発生ほ場率 8% (平年 22%)、発病株率は 1.0% (平年 4.3%) であった。
- ② 県南部 (田辺市以南) の早期栽培における 7 月中旬の葉いもちの発生ほ場率は 0% (平年: 発生ほ場率 25%、発病株率 5.7%) であった。
- ③ 8 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場では穂ぞろい期に追加防除を行う。
- ② 常発地では翌年から罹病性品種の作付けを避ける。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 県北部・中部 並
県南部 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部および中部の普通期栽培における 7 月上中旬の発生ほ場率は 0% (平年: 発生ほ場率 2%、発病株率 0.2%) であった。
- ② 県南部 (田辺市以南) の早期栽培における 7 月中旬の発生ほ場率は 33% (平年 10%)、発病株率は 4.0% (平年 0.9%) であった。
- ③ 8 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期に発病株率が 20% 以上のほ場では、早急に薬剤防除を行う。
- ② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加防除を行う。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部および中部の普通期栽培における 7 月上中旬の発生ほ場率は 0% (平年 0%) であった。
- ② 県南部 (田辺市以南) の早期栽培における 7 月中旬の発生ほ場率は 0% (平年 0%) であった。
- ③ 媒介虫であるヒメトビウンカの 8 月の発生量は、県南部で並、県北部・中部でやや少と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本病の発生が多いほ場では、ヒメトビウンカの防除を行う。

4. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 県北部・中部 やや少
県南部 並

(2) 予報の根拠

- ① 7 月上中旬の県北部および中部の普通期栽培における発生ほ場率は 4% (平年 48%)、25 株あたり生息密度は 0.04 頭 (平年 5.2 頭) であった。
- ② 7 月中旬の県南部 (田辺市以南) の早期栽培における発生ほ場率は 67% (平年 48%)、25 株あたり生息密度は 6.7 頭 (平年 4.9 頭) であった。
- ③ 予察灯による 7 月 1~20 日の誘殺数は、紀の川市 1 頭 (平年 4.9 頭)、上富田町 1 頭 (平年 1.1 頭)、那智勝浦町 0 頭 (平年 8.4 頭) であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 縞葉枯病の発生が多いほ場では、本虫の防除を行う。

5. ツマグロヨコバイ

- | | | | |
|----------|-----|--------|-----|
| (1) 予報内容 | 発生量 | 県北部・中部 | やや少 |
| | | 県南部 | やや多 |

(2) 予報の根拠

- ① 7月上中旬の県北部および中部の普通期栽培における発生ほ場率は13%（平成33%）、25株あたり生息密度は0.4頭（平成1.4頭）であった。
- ② 7月中旬の県南部（田辺市以南）の早期栽培における発生ほ場率は67%（平成35%）、25株あたり生息密度は6.0頭（平成2.0頭）であった。
- ③ 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市1頭（平成5.2頭）、上富田町0頭（平成19.4頭）、那智勝浦町29頭（平成204.3頭）であった。

6. セジロウンカ

- (1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月上旬の県北部および中部の普通期栽培における発生ほ場率は17%（平成52%）、25株あたり生息密度は0.7頭（平成13.8頭）であった。
- ② 7月中旬の県南部（田辺市以南）の早期栽培における発生ほ場率は83%（平成72%）、25株あたり生息密度は21.7頭（平成26.2頭）であった。
- ③ 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市19頭（平成55.2頭）、上富田町5頭（平成85.6頭）、那智勝浦町45頭（平成72.7頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期に株あたり成幼虫 10 頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

7. トビイロウンカ

- | (1) 予報内容 | 発生量 | 並 |
|----------|-----|---|
|----------|-----|---|

(2) 予報の根拠

- ① 7月上中旬の県北部および中部の普通期栽培における発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率2%、25株あたり生息密度0.1頭）であった。
- ② 7月中旬の県南部（田辺市以南）の早期栽培における発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率2%、25株あたり生息密度0.03頭）であった。
- ③ 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市1頭（平年2.4頭）、上富田町0頭（平年18.0頭）、那智勝浦町1頭（平年22.4頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫5頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

8. イチモンジセセリ (イネツトムシ)

- (1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月上旬の県北部および中部の普通期栽培における発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率1%、25株あたりツト数0.01）であった。
- ② 7月中旬の県南部（田辺市以南）の早期栽培における発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率2%、25株あたりツト数0.02）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬の発生に注意し、若齢幼虫の防除に重点を置く。

9. コブノメイガ

- | (1) 予報内容 | 発生量 | 並 |
|----------|-----|---|
|----------|-----|---|

(2) 予報の根拠

- ① 7月上旬中旬の県北部および中部の普通期栽培における発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率9%、25株あたり上位2葉の被害0.3葉）であった。
- ② 7月中旬の県南部（田辺市以南）の早期栽培における発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率27%、25株あたり上位2葉の被害1.4葉）であった。
- ③ 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による7月1日～7月20日の誘殺数は0頭（平成1.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

10. 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培の本田における7月中旬の捕虫網20回振りによる捕獲虫数は30.7頭（平成5.1頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市6頭（平成67.8頭）、上富田町53頭（平成33.3頭）、那智勝浦町343頭（平成164.1頭）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。
- ② イネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までにほ場周辺を除草する。
- ③ イネカメムシが多く生息しているほ場は、不稔被害防止のため出穂期に防除する。
- ④ カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期（出穂3日後）に薬剤散布する。出穂後、本田内で大型のカメムシ類の飛来を認めたら、乳熟期（出穂10日後）から糊熟期（出穂20日後）に薬剤散布する。

※ 水稻害虫の発生動向については、鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稻害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

Ⅱ. 野 菜

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は11%（平成14%）、生息葉率は0.1%（平成1.0%）、モモアカアブラムシの発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率2%、生息葉率0.6%）であった。
- ② 黄色水盤（紀の川市）による7月1～20日の飛来数は13頭（平成21.6頭）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は44%（平年35%）、生息葉率は7.7%（平年6.4%）、ナミハダニの発生ほ場率は11%（平年13%）、生息葉率は0.1%（平年3.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は33%（平年13%）、生息葉率は0.3%（平年2.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ナスでは、収穫果実の選別時に被害を認めたら防除を始める。
- ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ③ 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
- ④ 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率および生息葉率は、いずれも0%（平年：発生ほ場率3%、生息葉率0.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は11%（平年3%）、生息葉率は0.1%（平年0.1%）であった。
- ② フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、和歌山市250頭（平年150.9頭）、紀の川市116頭（平年120.4頭）、御坊市108頭（平年153.5頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼虫が中～老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢期（ふ化幼虫の集団の食害による白変葉がみられたとき）の防除を心がける。
- ② 抑制栽培エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

6. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、紀の川市39頭（平年28.5頭）、御坊市94頭（平年67.4頭）であった。

- ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① ハスモンヨトウに準ずる。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の果実での発生ほ場率は48%（平成28%）、発病果率は7.7%（平成5.6%）であった。
 - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 秋雨時期における後期感染防止のため、8月中下旬の防除を徹底する。
 - ② 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。
 - ③ 過乾燥等で樹勢が衰弱すると枯枝が増えるおそれがあるため、かん水等の栽培管理を適切に行う。

2. かいよう病

- (1) 予報内容 果実発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の春葉での発生ほ場率は23%（平成28%）、発病葉率は2.4%（平成1.0%）であった。
 - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 台風の接近等で強風雨が予想される場合には事前に薬剤散布を行う。
 - ② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので剪除に努める。
 - ③ ミカンハモグリガによる新葉の食害痕は病原菌の侵入口となる。幼木や高接樹では新葉が発生しやすいため本害虫の防除を徹底する。
 - ④ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は73%（平成24%）、発生葉率は23.4%（平成6.6%）、100葉あたり雌成虫数は141.0頭（平成22.4頭）であった。
 - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤は年間に2回以上使用しない。

4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は0%（平成1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第2世代2齢幼虫の発生最盛期は8月下旬頃と考えられる。発生ほ場ではこの時期に、散布むらがなく葉裏までかかるように、十分量の薬液を丁寧に散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は11%（平成0%）、果実の被害ほ場率は11%（平成18%）であった。
- ② 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる7月1～20日の誘殺数は、由良町261頭（平成160頭）、有田川町86頭（平成147頭）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 地域での発生消長調査の結果を参考に適期防除に努める。
- ② 発生ほ場およびイヌマキやサンゴジュに隣接するほ場では防除を徹底する。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は0%（平成1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 成虫の捕殺に努めるとともに、放任ほ場周辺など発生が多いほ場では、産卵防止および食入幼虫対象の防除として薬液を主幹から株元に散布する。

＜カ キ＞

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は「富有」0%（平成8%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平成0%）であった。
- ② 県北部における7月中旬の発病果率は「富有」0%（平成0.6%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。
- ② 台風が接近する場合は事前に薬剤を散布する。散布できなかったほ場では台風通過後速やかに散布する。
- ③ 密植ほ場や風通しの悪い場所は発病しやすいので、ほ場内の通風・採光をはかり、薬液をかかりやすくする。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は「富有」50%（平成68%）、「刀根早生」・「平核無」6%（平成22%）であった。
- ② 県北部における7月中旬の発病葉率は「富有」3.3%（平成4.8%）、

「刀根早生」・「平核無」0.1%（平年0.8%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に薬液を散布する。

② 一般に盛夏期の発病は一時休止するが、山間部や風通しの悪いほ場は発病を繰り返しやすいため、これらのほ場では秋雨前の予防散布に努める。

3. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」における発生ほ場率は25%（平年41%）、発病葉率は5.9%（平年3.3%）であった。

② 県北部では感染時期である5月上旬から6月下旬、また7月中旬に降水量が平年並～かなり多く推移した。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

② 子のう胞子の飛散が続く8月上旬まで防除が必要である。

4. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」における発生ほ場率は94%（平年70%）、発病葉率は15.2%（平年11.8%）であった。

② 県北部では感染時期である5月上旬から6月下旬、また7月中旬に降水量が平年並～かなり多く推移した。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

② 本病は7月頃から発病し二次伝染を繰り返すので、多発ほ場では発病後も防除を励行する。

5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は「富有」6%（平年44%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平年8%）であった。

② 県北部における7月中旬の寄生果率は「富有」0.4%（平年2.3%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平年0.5%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 第2世代ふ化幼虫の発生時期は7月下旬～8月上旬頃と考えられる。発生ほ場では8月上旬頃に、散布むらがなくへたにもかかるように、十分量の薬液を丁寧に散布する。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

① 県北部のカキにおける7月中旬の被害発生ほ場率は「富有」0%（平年

15%)、「刀根早生」・「平核無」0%（平年8%）であった。また被害果率は「富有」0%（平年1.4%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平年0.5%）であった。

② 紀の川市粉河の予察灯における7月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが30頭（前年13,934頭、平年1,711頭）、ツヤアオカメムシが4頭（前年4,490頭、平年591頭）であった。

③ 有田川町奥の予察灯における7月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが34頭（前年9,926頭、平年1,212頭）、ツヤアオカメムシが5頭（前年2,811頭、平年358頭）であった。

④ みなべ町東本庄の予察灯における7月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが52頭（前年6,541頭、平年1,088頭）、ツヤアオカメムシが16頭（前年1,650頭、平年315頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接ほ場では早くから被害が出やすい。

② 飛来の多いカンキツ園では落果が多数発生する可能性があるため、防除を徹底する。

③ カキでは「富有」で被害が大きいのので、特に注意が必要である。

④ ほ場内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。

⑤ 今後の発生動向については、農林水産部鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○鳥獣害対策課ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/072000/d00216368.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780